

住  
わ  
ん  
だ  
文  
芸  
評  
論  
家  
に

荒

正

人

展



わが街を知る西荻に住んだ文芸評論家 荒正人展  
杉並区立西荻図書館平成25年度読書週間企画展示  
同館1階ショーウィンドウ 2013年10月4日～12月4日

ごあいさつ……………3

——前期 10月4日～11月6日——

文芸雑誌『近代文學』……………4

『近代文學』と荒正人……………6

「現代英米文学研究会」……………8

インタビュ－ 山内久明氏……………9

文芸評論家・荒正人……………10

エンターテインメント小説—SF、ミステリなどへの関心……………11

漱石研究にささげた後半生……………12

インタビュー 山内(長野)玲子氏……………13

略年譜……………14

主催 \* 杉並区立西荻図書館 杉並区西荻北二一三三一九

資料・講演協力 \* 植松みどり 荒このみ 秋原茂 国立国会図書館 (公財)日本近代文学館

企画協力・編集 \* 西荻ブックマーク 西荻文学散歩の会 西荻案内所 KISS CAFE  
チラシ・展示デザイン \* めもとなおこ 図録取材・執筆 \* 奥園隆 組版 \* 前田年昭

印刷 \* シンソー印刷株式会社

【表紙イラスト】

荒正人研究室書庫。設計・浜口ミホ、杉並区西荻北、1961年。

浜口ミホは日本初の女性一級建築士、公団住宅のDKデザインの発案者。  
主婦の生活導線を考慮した台所設計など、戦後の住宅改善に貢献した。

荒正人一家 現けやき公園にて 1950年代後半

【裏表紙写真】

※ 本冊子は、展覧会会期中に配布した冊子を再編集し、西荻図書館のご厚意によりウェブ公開するものです。

## であります

2013年は文芸評論家・荒正人（あらまさひと）の生誕百年にあたります。1946（昭和21）年、荒正人は同人たちと文芸雑誌『近代文學』を創刊、論壇に登場しました。敗戦直後の混乱期に日本人が直面した、文学・芸術・科学などのさまざまな課題に対し、積極的に問題提起して注目をあびます。

その後は、文芸評論家、英文学者として精力的に活動しますが、彼の視線はつねに志を同じくする同世代や後続の文学者、研究者たちに向けられていました。その活動はおもに、ここ西荻を拠点として行われたのです。

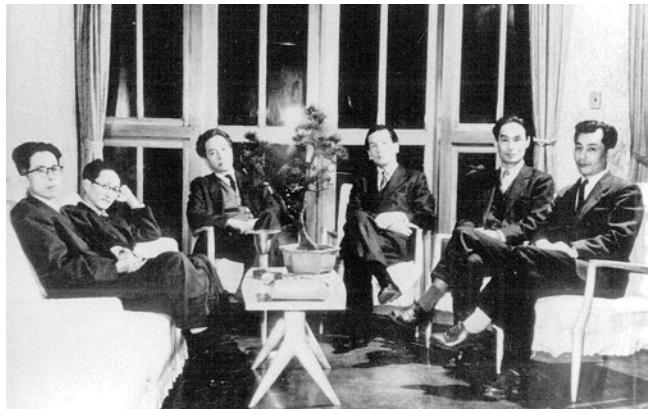
当展示では前期・後期の2回に分け、荒正人が戦後文学に果たした役割や、当地における活動をさぐります。戦後の物資や情報のとぼしいなか、荒たちがどのように自分たちの志を実現し、後続の世代を育ててきたのか。それを知ることが、私たちにも大きな示唆を与えるのではないかと考えます。

開催にあたりまして、荒正人ご息女の植松みどり・荒このみ両氏、萩原茂氏の多大なるご協力を頂戴しました。厚く感謝申し上げる次第です。

# 文芸雑誌『近代文學』

1946（昭和21）年1月—1964（昭和39）年8月

『近代文學』は終戦直後、荒正人・平野謙・本多秋五・埴谷雄高・小田切秀雄・山室静・佐々木基一の7人の同人によって創刊。藝術・個性・人間性を重んじ、政治によつてそれらがゆがめられることを批判、活発な論争を巻きおこしました。プロレタリア文学や私小説の系譜に一線を画し、戦後の状況を見すえつつ、観念的な文学を築こうとした戦後派の文学者たちを擁護し、積極的にとりあげました。



1 写真『近代文學』同人たち 日本近代  
文学館提供

2 『近代文學』創刊号 1946（昭和

21）1月

編集人・本多秋五。ゲストを招いての座談会、荒や平野謙の先鋭的な論文、埴谷雄高の小説「死靈」の連載などが注目された。紙の調達やレイアウトは埴谷が担当し、コスト軽減のため表紙はつけず、全ページいっぱいに文字を組んだ。同人が分担して書店をまわり、販路を広げた。発行一万部（埴谷・荒による）、数千部脱りあり。

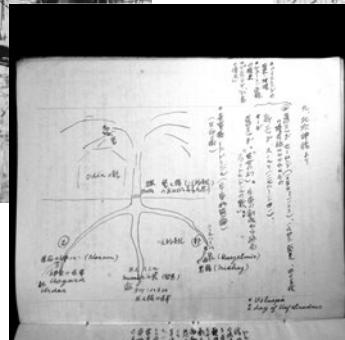
3 『近代文學』2号（「第二の青春」掲載）1946（昭和21）年

4 荒正人『第二の青春』八雲書店 19

47（昭和22）年

「もし、しんの希望が、敗戦日本という沙漠のなかから、不死鳥のごとく羽搏

8	6	1
7	5	432



8 7 6

5

荒正人『負け犬』真善美社 1947  
(昭和22) 年 学論争へと発展する。

「この地球をアクロポリスにするか、ネクロポリスにするか。この巨大な課題を解きうるのは、広い意味でも狭い意味でも政治あるのみである」(同書収録「火」より)

文明全般にわたる広い知識を背景に、格調たかく情熱的な文体によってつづられた荒の主張は、当時の若い世代に大きな影響をあたえた。

原稿〔荒正人「二十代の不思」〕 1944

7 (昭和22) 年

執筆のためのノートより  
荒家蔵

昭和20年代の荒正人 善福寺池にて

き生れるとするならば、その死灰となるものは、第一の青春に夢みたヒューマニズムを悉皆否定し、焼き尽くしたものにはならない」

自らの世代(30代)の「第二の青春」

の課題を訴えたこの論文は、「近代文學」の主張を代表するものとして反響をよんだ。プロレタリア作家・中野重治は、これを平野謙「ひとつ反撗定」などとともに反革命的論述として批判。荒・平野らは反論し、「政治と文學」論争へと発展する。

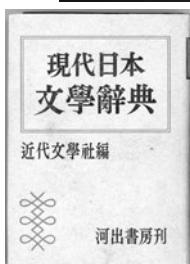
## 『近代文學』と荒正人

荒正人は『近代文學』が、戦後文学の「メイン・カレント（主流的立場）」となることを唱え、多くの実力作家を登場させようと奔走します。最盛期の『近代文學』には30名以上の同人が参加、終刊までの18年間、戦後派作家の一大拠点となりました。

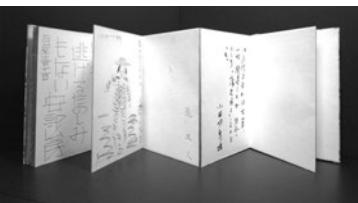
荒はまた事務方として出版社との折衝などに活躍。さらに、各種の辞典・事典、研究書などを企画し、同人に執筆を依頼、編集しました。一方で『近代文學』に集まる作家や学生たちとも、自宅で読書会や研究会をおこなっています。

このころの荒の活躍を、身近に知る存在であった平田次三郎（『近代文學』の実質的な編集長）はこう書き残しています。

「荒正人のオルガナイザーとしての力量は、抜群であった。荒の頭脳は、……さまざまに錯綜する配置図を適格に調整しながら、働いていたようだ。自分が目を付けた男の過去のデータ、そしてそこから読み取れる将来の可能性、その可能性を引き出すための助言、現実的手段。荒正人には、そうした特異な才能があつた」（『戦後文学再掘』）



8	7	4	1
9		5	3 2



- 1 荒正人 東中野・モナミ喫茶店にて 昭和20年代  
2 近代文學社封筒、荒家蔵  
3 近代文學社編『現代日本文學辭典』  
河出書房、1949（昭和24）年  
以下は荒が主導し、同人たちが執筆した書籍各種。編集作業には、文学を志す若い研究者や、学生などがアルバイトとして参加。『現代日本文學辭典』には荒に師事した学生時代の日野啓三も加わっている。
- 4 荒正人ほか『世界人名百科辞典』  
青溪書院、1951（昭和26）年
- 5 荒正人ほか『昭和文學十二講』改  
造社、1950（昭和25）年
- 6 荒正人ほか『時代の告白』真善美  
社、1947（昭和22）年
- 7 『近代文學』終刊号、1964（昭  
和39）年8月
- 8 近代文學同人色紙 荒家蔵
- 9 同人たち 1970年代後半

# 「現代英米文学研究会」

「現代英米文学研究会」は、荒正人・瀬尾裕・小津次郎らによつて、20世紀イギリス・アメリカ文学の情報交換を目的にはじめられた英文学者たちの談話会。月に1回、荒の自宅にておこなわれました。やがて研究者たちの輪読や作品研究、書評などの発表の場となり、大橋健三郎、佐伯彰一、小田島雄志、近藤いね子、高野フミ、内田（行方）道子、板橋（長田）好枝などの研究者や、東大・津田塾・早稲田大などの助手・学生たちも参加。学閥を廃し、年代を問わず平等に発言できる研究会として、活発な討議がおこなわれました。

## 「現代英米文学研究会」記録抄

植松みどり 「英文科の会」と父より

1955年2月 大橋訳『空の誘惑』、平野敬一・増田義郎訳『二十世紀作家の没落』出版記念会。

1956年 ジョイス研究開始。

1957年 エリオット研究開始。

1958年 4月ヘンリー・ジェイムズ研究開始。座

談会・作品研究『ユリシーズ』（『近代文學』7月号）

1949年 中橋「ジョイスと神秘思想」（『近代文學』4月号）

1959年 1月D・H・ロレンス研究開始（～60年4月）。

1951年 瀬尾「A・ハクスレー論」（『近代文學』9月号 現代外国作家論特集）。高野フミ、近藤いね子らが会に参加。

1952年 11月（これより会での発表の記録）丸谷 刊行。『エリオット入門』を南雲堂より

才一「グレアム・グリーン論」内田「ユリシーズ」について

1954年 11月高野「H・ジェイムズの手法（最近の研究について）」佐伯「G・グリーン『地図のない旅』書評」。発表と書評が定例化。

1963年 研究会終了。



研究会は先生方からの学びの場でした

## インタビュー 山内久明氏

(現代英米文学研究会メンバーエスコット・ジョンソン)

大学院の博士課程の時に、荒先生とお親しかつた上野景福先生のご紹介で、そ

その方々の議論の立派さにもたいへん感化を受けたものでした。

女) の英語の家庭教師としてうかがつたのが始まりです。そのときに私のほうから参加をお願いしたのかもしれません。61年から会に出始めて、62年にアメリカに行くまでの間出席いたしました。

ですが、日本ではとくに戦後たいへんに広まり、大学の中でも盛んに読まれていました。英文学界では1950年代は神様といった存在でした。

三郎先生がおられました。大橋さんは大  
学問の枠を超えてアメリカ文学の指導  
的立場に立たれた方ですから、その力を  
借りた荒さんは慧眼だつたと思います。  
ジョイスやエリオットについては、大橋  
さんのご専門には直接の関係はなかつた  
のですが、積極的に参加されて会全体の  
雰囲気を作つておられました。ご発言が  
いかに強力であるかということを、間近  
に感じております。他によく発言な

ので、（――いちばん労力がいる仕事を任せられたのですね？）といえいえ、論は書けないだろうがこれならばできるだろうといふことで、あてがわれたのだと思います。まだ本作りの要領がわからず、今から思いますと名前の拾い方が少し細かすぎたようです。人名で統一して、その下に事項や作品名をおきました。カード作りにはかなり手こづったことを覚えております。

さつていたのは小野協一先生、鈴木建三先生、羽矢謙一先生や小野寺健先生で、

——私どもから見ましても、コンパクトト  
でかつ百科全書的、といった性格の面白い

本になつてゐるよう思ひますが

そうですね。英文学研究というよりも、文芸批評家としての荒さんの感覚が生か

されている本だと思います。それで思っているのは、私も高校時代こ話用いた

出でてゐる。高橋時代は満月でしたが、近頃は月が薄く、また、月の位置もさう遠いです。

された『現代日本文学辞典』です。当時は頃書き、二、三の、二、三の二言

は類書もなく、そのうえ小型で非常に便利な文学辞典でした。コンパクトで批評

的に書く文体を、私もあるの辞典から学び

ました。文芸批評家としての荒さんが、研究者との対話の窓口を開かれたこと

研究会の発言の整理を間もなく  
が、研究会の成果の一つでした。

当時の私は日本人が英文学を研究するの興味、面白さを知った。

ことの限界について悩んでおりました。

り、言語の障壁もある。どうやつて日本

と英語圏との間をつなぐのかが課題であり、寒祭に海外に飛び出でて、くのです

が、その前の段階として、研究会での体

験は、まず先生方からの強烈な学びの場

であつたこと、個人が何物にもとらわれず、研究対象と向き合うかという体験

であつたと、今も記憶にとどめておりま

す。  
(談)

321  
54

## 文芸評論家・荒正人

荒正人は文芸雑誌『近代文學』の活動により、戦後文学の中心的評論家となりました。新聞・雑誌の文芸時評欄の執筆のほかに、各種文学賞の選考者となり、有望な新人を発掘しました。大江健三郎、星新一なども荒の推薦で世に出た作家たちです。

やがて景気の拡大に従い、文学の出版点数が増加し、1950年代、60年代の文学全集ブームの際には、荒は国内外の文学における豊富な知識を買われて、各社の全集企画に参加、編纂や解説を請け負いました。



- |  |                                      |                             |                                |                                |
|--|--------------------------------------|-----------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 5<br>年   | 4<br>年                               | 3<br>年                      | 2<br>年                         | 1<br>年                         |
| 荒正人編『新日本文学全集 第12巻 (きだみのる・深沢七郎集)』集英社、1963 (昭和38年) | 荒正人『雪どけを越えて (政治と文学)』笠書房、1956 (昭和31年) | 荒正人『市民文学論』青木書店、1955 (昭和30年) | 荒正人『戦後文学の展望』近代生活社、1954 (昭和32年) | 荒正人『小説家 現代の英雄』光文社、1957 (昭和32年) |

- 40 年  
荒正人編『新日本文学全集 第2巻 (鮎川信夫・仁木悦子集)』集英社、1965 (昭和38年)

# エンターテインメント小説——SF、ミステリなどへの関心

高度成長期を迎えて、読者の多様な嗜好にこたえて、文学もさまざまなジャンルにおいて発展していくます。荒正人は大衆文学——SF、ミステリ、時代小説などのエンターテインメント小説の愛好者でもあり、こうしたジャンルの拡大に対し、文芸評論家として積極的にかかわりました。



荒 正人氏評 塔晶夫の  
「虚無への供物」を読ん  
で私は心から驚嘆した。  
練りにねられた密室殺人、  
現代ばなれした神祕的構  
図、機智に満ちた衝突学題、  
味——という仕掛けで、  
小栗虫太郎に挑戦し、み  
ごとに勝利を占めている。

探偵小説の繁昌騒ぎから  
遠く離れて、この長編に  
十年の歳月を賭けたとい  
う。その情熱と野心も、  
いま、あます所なく報い  
られた。現在の探偵小説  
は飽きた人たち、満たさ  
れぬ人たち、そういう読  
者に、この異色篇をあえ  
てお奨めしたい。

1 荒正人・福島正実・石川喬司「日本のSF  
はこれでいいのか」『別冊宝石』1964  
(昭和39)年3月

2 荒正人編『探偵小説名作全集 江戸川乱歩  
集』河出書房、1956(昭和31)年

3 荒・中島河太郎編『推理小説への招待』南  
北社、1959(昭34)年

戦後、江戸川乱歩の知遇を得ると、荒は内外の探偵小説のよき読み手として信頼をうける。とともに探偵小説全集の編纂にかかわり、乱歩賞の選考委員についた。

4・5 塔晶夫『虚無への供物』講談社、19  
64(昭和39)年 表紙と帯裏!荒正人評  
東大在学中、西荻に住み、荒とも交流があつた中井英夫。この作品を変名で乱歩賞に応募する。選者の中で最高得点をつけたのは荒正人だった。のち出版記念会の際にも荒は発起人に加わっている。

# 漱石研究にささげた後半生

文学研究者として、なかでも荒正人が興味をもつたのが夏目漱石でした。1953（昭和28）年に発表した二つの論文、「漱石文学の物質的基礎」「漱石の暗い部分」は、漱石の経済状況や深層心理に注目したアプローチによって、その後の研究者にも影響をあたえます。

やがて荒の関心は、漱石作品の本文校訂や生涯の行動を調査・記録することにうつります。『漱石文学全集』刊行後、『漱石研究年表』の増補作業のなかばで、荒は66年の生涯を終えました。



- 1 荒正人監修『夏目漱石全集 第11巻・伝記篇 第12卷・研究篇』創藝社、1954（昭和29）年  
2 荒正人『夏目漱石』五月書房、1957（昭和32）年  
3 荒正人・伊藤整編『漱石文学全集』全10巻 集英社、1970（昭和45）年

綿密な本文校訂、戦後の研究成果をふまえた注解など、当時として望みうる限りの編集がなされた『漱石文学全集』。別巻「年表」は、漱石の生涯の日・時・分にいたるまでを網羅しようとする画期的なものだつたが、さまざま不備が指摘され、荒は増補版の作成を決意する。

- 4 荒正人著・小田切秀雄監修『増補改訂漱石研究年表』集英社、1984（昭和59）年  
ほぼ全国におよぶ実地調査や、膨大な資料の涉獵でのぞんだ増補作業のなかで荒は急死する。遺された16冊の書き込み本をもとに、秘書・遺族たちの尽力によって増補改訂版は原著の約2倍の量となつて刊行された。

## 荒正人先生アシスタントの思い出

インタビュー 山内（長野）玲子氏

（元荒正人アシスタント／翻訳家）  
山内久明氏（9頁参照）夫人

先生のお宅に通い始めたのは、大学を卒業してまもなく、1960年の春のことでした。翌年にはアメリカ留学を志していましたが、たまたま英文学の研究で津田塾大学の研究科（大院文学研究科の前身）に入りましたが、その頃、恩師の内田（行方）道子先生から、荒正人先生のアシスタントの仕事があるかどうかしら、とご紹介を受けたのでした。

週1日、下働きの見習いといったところで、いわれたことをするのに一生懸命でした。「郵便局へ行つてください」「ハイ」「書庫の本の埃払いをしてきてください」「ハイ」。書庫は面白そな本がぎっしりで、つい背表紙を見ていたい遅くなり、お叱りが飛んできたこともあります。その厳しさに最初は驚きましたが、すぐに優しい面も見せられるので、ご性格もだんだんわかつてまいりました。



荒正人 自宅2階書斎にて 1950年代

当時のアシスタントは国文学がご専門の方がお二人、口述筆記をされる宮崎（宮本）文代さん、のちに『漱石文学全集』などを担当なさった齊藤（名取）静枝さん。英文学のほうは、津田で同期の内水（大田）裕子さん。仕事を別々でしたが、お昼はいつも

ショで楽しい時間でした。その方たちを通じて、先生のお仕事も少しずつ分るようになりました。私の仕事は主に雑用でしたが、たまたま英文学の作品を調べたり、先生の手書き原稿の清書をしたりすることもありました。ご自宅の二階奥の部屋は口述筆記などをなさるところで、ちょっと神聖な雰囲気がありました。中央の和室で新聞の切り抜きなどをしていますと、先生が来られ、レコードをかけて原稿を書かれることもありました。とくにベートーヴェンの弦楽四重奏曲がお好きのようでした。鉄筋コンクリートの新館（研究室書庫）が完成して、蔵書が新しい書棚にぎらりと並んだときは感激しました。英米文学研究会のお手伝いもしましたが、先生方の熱い談論に触れるのが楽しみでした。

1961年に留学するときは、先生がアシスタントの方たちと歓送会をしてくださいました。短い期間でしたが、刺激にみちた懐かしい日々として思い出します。（談）

# 略年譜

1913 (大正2) 年	1月1日、福島県相馬郡鹿島町に生る。父善五郎（農学 校校長）、母キヨの第1子。幼少時は全国を転々とする。	0歳	1938 (昭和13) 年	帝大卒業。4月、藤沢中学校に英語教師として勤務。	25歳
1919 (大正8) 年	長野県白田小学校入学、すぐ南佐久郡馬流小に転校。	6歳	1939 (昭和14) 年	4月、小野原靜枝と結婚。同月、東京府立第九中学校に 赴任。10月、佐々木、小田切と『文藝學資料月報』（3号 まで継続）。雑誌『構想』で埴谷雄高を、『現代文學』で 大井廣介、平野謙、本多秋五を知る。赤木俊のペント ムで精力的に評論を発表。	26歳
1920 (大正9) 年	鳥取県倉吉町明倫小学校に転校。倉吉アドヴェント教会 に通う。	7歳	1942 (昭和17) 年	9月、長女みどり生る。翌年にかけて、パウア『中世期 の人々』、クック『キヤプテン・クック太平洋航海記』な どを翻訳。	29歳
1922 (大正11) 年	徳島市内の小学校に転校。翌年火星の大接近、宇宙に興 味を持つ。	9歳	1944 (昭和19) 年	1月、埼玉県久喜町に疎開。4月、小田切、佐々木との 読書会が治安維持法に触れ、久喜署に身柄を拘束、のち 神楽坂署に留置。12月、未決（東京拘置所）に移され27 日釈放。府立九中辞職。	31歳
1927 (昭和2) 年	鳥取県立第一中学校に転校。肋膜炎になり1年休学。	14歳	1945 (昭和20) 年	1月から秋まで、麻生鉱業に勤務。8月、敗戦を機に、 同人とともに雑誌『近代文學』、文学新聞『文學時標』の 創刊を計画。12月30日『近代文學』創刊、新日本文學会 設立大会で発売。	32歳
1929 (昭和4) 年	組合教会の宣教師により受洗。中学4年で修了。	16歳	1930 (昭和5) 年	山口高等学校文科甲類入学。2年次より学内の政治運動 に熱中、32（昭和7）年、無期停学となる。翌年復学。	22歳
1934 (昭和9) 年	このころ杉並区松庵北町（現西荻北）に転居。	21歳	1935 (昭和10) 年	東京帝国大学文学部 英吉利（イギリス）文学科入学。 大学で山口高校の後輩、佐々木基一を知る。	23歳
1936 (昭和11) 年	久保田正文と読書会「文芸学研究会」を始める（昭19）。	24歳	1946 (昭和21) 年	1月、『文學時標』創刊。2月、次女このみ生る。『近代 文學』誌上の「第二の青春」「民衆とはたれか」「などの 論文が反響を呼ぶ。中野重治らとの「政治と文學」論争。	33歳
			1947 (昭和22) 年	11月、疎開先より杉並区井荻（現西荻北）に移転。「負け	34歳

犬』『第二の青春』などが出版される。

1964（昭和39）年

51歳

1948（昭和23）年  
35歳

4月、『近代文學』終刊決定の記者会見、8月、終刊。5月、中井英夫『虚無への供物』出版記念会の発起人となる。

36歳

1966（昭和41）年  
53歳

6月5日、糖尿病の昏睡状態で西荻の駒崎医院に入院。

1949（昭和24）年  
36歳

1953（昭和28）年  
40歳

河出書房が『近代文學』を支援、発売を引き受ける。同社の出版企画に参加、『現代日本小説大系』編集など。

6月5日、糖尿病のため東大病院に入院。翌年春退院。

1955（昭和30）年  
40歳

1968（昭和43）年  
55歳

8月、東京新聞に「回想・昭和文学四十年」を連載（→12月）。

6月、糖尿病のため東大病院に入院。翌年春退院。

1957（昭和32）年  
44歳

1969（昭和44）年  
56歳

河出書房倒産、近代文學社を荒宅にうつす。4月、法政大学文学部英文科講師になる。5月、東京大学新聞が主催する文学賞の選考委員の一人となる。（→14回まで）

6月、糖尿病のため東大病院に入院。翌年春退院。

1959（昭和34）年  
48歳

1970（昭和45）年  
57歳

中井英夫らとともに三一書房『久生十蘭全集』を編集。

6月、糖尿病のため東大病院に入院。翌年春退院。

1961（昭和36）年  
49歳

1974（昭和49）年  
61歳

集英社『漱石文学全集』の編集、本文校訂、解説にあたる。

6月、糖尿病のため東大病院に入院。翌年春退院。

1962（昭和37）年  
49歳

1975（昭和50）年  
62歳

1月、『漱石研究年表』によつて第16回毎日芸術賞を受賞。

6月、糖尿病のため東大病院に入院。翌年春退院。

1963（昭和38）年  
50歳

1976（昭和51）年  
63歳

4月、日本近代文学館評議員、11月、日本ペンクラブ理事に就任。10月、『漱石文学全集』完結。別巻『漱石研究年表』増補改訂作業を開始。

6月、糖尿病のため東大病院に入院。翌年春退院。

1964（昭和39）年  
51歳

1977（昭和52）年  
66歳

5月、日本文芸家協会理事に、翌年9月、国立国語研究所國語辞典編集準備委員に就任。

6月、糖尿病のため東大病院に入院。翌年春退院。

集英社『新日本文学全集』、東都書房『日本推理小説大系』『世界推理小説大系』の編集に加わる。7月、渡欧。

6月、自宅向かいの敷地に研究室書庫を建設、落成。8月、第3回国際比較文学学会議（ユトレヒト）出席、『蘭学事始』について報告。山室静と北欧諸国などを訪れる。

6月5日、糖尿病の昏睡状態で西荻の駒崎医院に入院。一時回復するも、8日朝『漱石研究年表』とペンを手に、意識不明になつているのを発見される。9日永眠。

荒このみ・植松みどり編 年譜・執筆、著作目録（荒正人著作集）をもとに作成

